

---

# 風が哭く

都築遊馬

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

風が哭く

### 【Nコード】

N2974T

### 【作者名】

都築遊馬

### 【あらすじ】

一人暮らしをしている藤堂安曇は、お気に入りの場所でマンションの隣の部屋に住んでいる家族のイギリス人の旦那さんの弟くんと出会った。弟くんは兄夫婦をあまりよく思っていないようで、納得すまで帰らないと言いつつ出した。彼を説得するために協力を頼まれて、否応無しに彼に関わるようになってしまった。

弟くんを説得しようとする手この手を使うが逆に何故か興味をもたれて更に面倒ごとに巻き込まれる。私の平穏を返して

！！

## 第一話（前書き）

気の向くままに書き始めた話なので先のストーリーが何もまとまっ  
ていません・・・（汗  
お楽しみ頂けたら幸いです。

## 第一話

終業式を迎え、長期休暇に入って数日が経ったある日、私はお手製のスコーンと紅茶の入った水筒、前から読みたいと思っていた本を鞆に入れてマンションの部屋を出た。

「いつてきまーす！」

誰の返事も返ってくることはないのは分かっているけど、必ず一声かけて出て行く。これは幼い頃に亡くなった祖母の教育の賜物だ。そのおかげで学校でも生活態度に問題はないという評価を先生方からいただいている。

まあ、勉強はもう少し上を目指せと言われたが……。

マンションから歩いて数分のところにある駅から上り電車に乗って三つ先の駅で降りる。

以前、居眠りをして乗り過ごしたときに降りた駅で、とても静かで緑が溢れている街だった。私は閑静な住宅街へ続く道の隣に忘れ去られてようにぼつんとある細いわき道を進んでいく。

なだらかに続く一本道は舗装されてから何十年もそのままなのだろう、所々にひび割れが入っているし、雑草が好き勝手に生えている。

しばらく歩いたところにある小さな神社の境内でまずはお参りをして、それから社の裏側にある緩やかな山道を登っていく。歩いて十分くらいで頂上に着けるし、いい運動になる。頂上には樹齢二百年くらいの大木が立っていて、周りは小さめの木々で囲まれている。誰も来ないこの場所でのんびりと過ごすのが私の最近の日課だ。

今日も大木の幹を背もたれにして本を読もうと思ったが、丁度大木で死角になっている場所に誰かいた。

その人はプラチナブロンドの髪に深い緑の瞳をしていた。日に当

たっている白い肌は透き通っていて、見ている人全てが振り向くほどの整った顔立ち。日本人にはない、すらりとした長い足に決して細いわけではないがかといって筋肉質なわけでもない均整の取れた体つきの同じ年ぐらいの男の人。

うわぁ、外国人だ・・・。

私は思わず見とれてしまった。

向こうも私に気付いて、驚いた顔でこちらを見てきた。

「Who are you?」

「・・・えーと、こんにちは?」

私が英語で話しかけるとその人は更に驚いた顔をした。

まあ、私が英語話せるって知らないから当たり前だよね・・・。

私の家の隣には国際結婚した家族が住んでいる。その家の双子の姉妹の遊び相手をしていて仲良くなったのだ。

駆け落ちしてきたのよねー、と呑気に言っていた女性は笑顔のかわいいい人で、ホンワカした雰囲気がある。和ませてくれる。イギリス人の旦那さんもお茶目な人でよく笑わせてくれる。

将来世界旅行に行きたいなー、なんて私が言ったら英語が話せたほうがいいからって言って教えてくれたのだ。先生がいいから私もすぐに話せるようになって日常会話なら普通に喋れるようになった。

「英語、話せるのか?」

「うん。知り合いに教えてもらったから」

「そうか・・・」

彼は突然黙り込んで何か考え始めた。ちらちらとこちらを見ているのは気のせいだろうか、いや、気のせいじゃない(反語)。

「なあ、ここは立石町で合っているか?」

「・・・ここは立石町じゃなくて立岩町だよ」

立石町と立岩町。本当に間違われやすい地名で、たまに郵便物が間違つて来ることもあるくらいだ。かく言う私も、立石と立岩の駅名を間違えて降りてしまったことがある。

『立岩……?』

『そう。立石町は下りの電車で駅三つ先だよ』

『……』

あ、黙つた。多分、間違えたのが恥ずかしいんだろうな。

『初めての人が間違えても仕方ないよ。地元の人でもときどき間違えるし』

『……』

明らかにほつとした様子だ。

きつと道間違えたりとかしたことはないからどうしたらいいか分かんなかったんだろう。

そう勝手に結論付けた私はどうするべきか考え始めた。

一、駅までの道のりを教えて　　といつても一本道だが　　自分  
はここでのおんびり過ごす。

二、彼の行きたいところまで道案内をする。

三、何もしない。

私としては一を選びたいところだが、土地慣れしていない彼を一人で行かせるのも少し心配だ。かといって自分から道案内を買って出てもただ厚かましいだけだろう。

どうしよう、と悩んでいると彼のほうから声がかかった。

『その……すまないが道案内を頼めるだろうか?』

『へ……あ、うん。いいよ』

『ありがとう』

そう言つて彼が笑つたとき、ふんわりとした雰囲気の花が咲いたように色づいた。それを直に見てしまつて思わず顔が赤くなりそうになる。

『・・・どうかしたのか？』

『な、なんでもないよ！・・・それで何処行きたいの？』

『ああ。ここなんだが・・・』

話を無理やり戻そうとした挙動不審な私の行動をスルーして住所を書いた紙を見せる。

「・・・・・・・・」

住所を見たとき、私は思わず無言になってしまった。

『どうした？』

『いや、あの・・・この住所、私の住んでるマンションんだけど』

『そうなのか！？・・・では俺の兄を知っているのか？』

『ウィリアムさんがお兄さんだって言うなら知ってるけど・・・』

私が出した名前に彼はすぐさま反応を見せる。

これは彼の兄弟とみて間違いないのだろう。

『えっと、とりあえず行こう？』

『ああ』

私は彼を連れて駅へ向かおうとしたが、一つ大事なことを忘れていたのに気付いた。

『そういえば名前言ってなかったね。私は藤堂安曇<sup>トウドウアスミ</sup>。よろしくね』

『俺はイリス・ローデンハイルだ。よろしく頼む』

とりあえずの挨拶は終わったので私たちは再び歩き出す。山を降りてから携帯で陽菜さんに連絡を取る（ウィリアムさんと話が通じなくなることが多々あるのだ）。イリス君に会った経緯を話して連れて行くことを伝えた。イリス君に電話を代わると、一言三言話して電話を切った。その顔はに少し苛立ちが見える。

目的地までの道のりで、イリス君はウィリアムさんたちのことを聞きたがった。私は当たり前障りのないことだけを言っただけで他はのらりくらりとかわしていた。

さすがに隣に住んでるっただけで詳しいことまでは言えない。まあ、知らないほうが良かったなと思うこともいろいろ知ってしまったけど・・・。

立石駅を降りていつもの帰り道を歩く。

そこから先はイリス君も無言になったが特に気まずいわけではないので自分からは話しかけない。というよりも話しかける要素がない。

マンションに徐々に近づくにつれ、マンションの前で立っている人影が見えてきた。

「陽菜<sup>ヒナ</sup>さん、ウィリアムさん」

「安曇ちゃん。．．．ありがとう、わざわざ連れてきて貰って」

「うっん、気にしないで」

陽菜さんが申し訳なさそうに言うので私は笑って返した。

イリス君のほうを見ると、恨めしげな眼をウィリアムさんに投げかけていた。

あれ．．．会いに来たんじゃないっけ？

『兄さん、まだこんな女と暮らしてたの？』

「ここは日本だ。日本語を使いなさい」

「ちよつと待つて。君は日本語を話せたの？」

あえて日本語で質問すると、イリス君はばつの悪そうな顔をしながら答えた。

「．．．．．少しだけなら話せる」

「少しという割には流暢な日本語だね」

わざわざ使わなくても良かった英語を使わされてつい皮肉を言うてしまった。

「ごめん．．．」

イリス君も悪いとは思っていたらしく、素直に謝った。

それをみたウィリアムさんと陽菜さんが眼を丸くしてこちらを凝視してくる。

「ウィリアムさん？」

「ああ、すまない。イリスが謝る人なんて祖母以外にいなかったから」

そうだったのか。それは貴重な経験をしたものだ。

「とりあえず疲れただろうし、中に入ろう。・・・アズミちゃん、君もいてくれ」

「ええっ!？」

込み入った話になりそうだったから、じゃあ私はこれでー、と言って立ち去ろうと思ったのに先手を打たれてしまった。

「兄さん!？」

イリス君も部外者の私と呼ばれていることに驚いている。

「大丈夫だ。彼女は事情を全部知っている。・・・俺から話した事だ」

そう言われたイリス君は驚愕の眼差しを私に向ける。

つい先程まで知らぬ存ぜぬで質問を全部かわしていたのだから、何も知らないと思っけていても仕方がない。

「とりあえず入りましょ。ここにいても仕方がないわ」

陽菜さんの言葉で私たちは家の中に入っていく。

もちろん、私はイリス君から射殺されそうなほど鋭い視線を受けながらけど・・・。

## 第一話（後書き）

果てしなく莫迦な間違いをしていたので訂正しました・・・（泣）

誤字脱字を発見しましたら教えてください・・・><

## 第二話

部屋に通された私たちは、陽菜さんとウィリアムさんが座った反対にイリスくんが座って、私は少し離れたところで話し合いを聞くことになった。

「それで、彼女に事情を話したってどういうことだ？」

イリス君は苛立ちを隠すことなくウィリアムさんたちにぶつける。イリス君の斜め後ろに座っている私はうわあ、なんて思いながらその状況を眺めていた。

「アズミちゃんはうちの隣の部屋に住んでいるんだ。その付き合いの延長線で話しただけだ」

「こいつが周りにバラすとか考えなかったのかっ!？」

「アズミちゃんはそんな子じゃない」

ああ、とうとうこいつ呼ばわりされちゃったよ。あとでシメておこう。うん、決定。

「何度も言っている筈だ。私はヒナと別れるつもりもないし、家に戻るつもりもない。彼らにもそう伝える」

「じゃああの莫迦な従弟に当主継がせるのかよ!」

「父さんがそう言ったのならそうなるだろう」

「兄さんは当主になりたくないのか!？」

終始イリス君が声を荒げて会話　もとい、喧嘩　が続いていきます。

「なれと言われればなる。だが、それによってヒナと別れさせられるというのならならない」

「っ!・・・なんでその女なわけ?それだけは教えるよ」

きっぱりと言い切ったウィリアムさんにイリス君は声を失ったみたいに途端に腑抜けた感じになった。

「ヒナが私に安らぎをくれたから」

「安らぎって・・・何だよそれ、まるで家の中が息苦しかったみたいない言い方は」

イリス君はウィリアムさんの言葉を認めたくなくて、でもウィリアムさんが家を出たの事実だからどうしていいのか分かんないって顔してる。

きっと彼は知らないのだろう。ウィリアムさんがどういう気持ちであの家を出て、日本へとやってきたのか。

「・・・イリスさん。あなたがこの人を大事に思ってくれているのはよく分かるわ」

沈黙が降りていた場でそれを破ったのは、今まで一言も喋らなかった陽菜さんだった。

「でもね、これ以上ウィルがあの家には縛り付けられてたらウィルはウィルでなくなっちゃってたかもしれない。わたしはウィルを助けたかったの」

「それで・・・それで兄さんに何もかもを捨てさせたのかよ!」

イリス君がそれまで以上に声を荒げて陽菜さんを睨む。そして、陽菜さんはそれを静かに受け止めている。いや、正確には受け止めようとしている。

陽菜さんの中にもウィリアムさんに全てを放棄させてしまったという自責の念が強く根付いている。そこを突かれて、動じないわけがない。

「あんたがいなかったら兄さんはずっとあの家で父さんと母さんと一緒に暮らしてた。それをあんたが壊したんだ!」

「イリス、それは違う!」

「何が違うんだよ!その女が兄さんを・・・!」

イリス君の言葉はそれ以上続かなかった。否、私が静かに立ち上がってイリス君に平手打ちをかましたから続けられなかったのだ。うん、いい音がした。

さすがのウィリアムさんもいきなりのことに呆然としている。

「君さ、相手を傷付けてるって自覚ある？」

「っ！？」

「その顔はないみたいだね。じゃあ言っとくけど、君が今言おうとした言葉は陽菜さんだけじゃなくてウイリアムさんも傷つけることになるよ」

「なっ・・・なんでそんなことがお前に分かる！」

「『その女が兄さんを誑かして、身体使って誘惑したんだろ』とでも言いたかったんじゃないの？」

「それは・・・」

押し黙ってしまったのでおそらく凶星なのだろう。

「それ言ったらさ、陽菜さんも傷つけるし陽菜さんの手をとったウイリアムさんも侮辱してることになるんじゃないの。それくらい分かるでしょ」

「・・・・・・」

反論できないから無言になったか。

とりあえず言いたいことは言ったから私は元の場所に戻った。

「あ、どうぞ話続けてください」

って、さすがにこの空気じゃ無理かな。陽菜さんは今にも精神の糸が切れそうなほどギリギリなとこに立ってる感じだし、多分ウイリアムさんとイリス君だけだと話し合いにもならないだろう。

「・・・これ以上話しても進展しないみたいですし、今日のところはこれくらいにしたほうがいいんじゃないですか？」

ウイリアムさんにそう提案すると、そうだね、と了承の返事が返ってきた。

「もうお昼だ。何か食べよう」

「あ、じゃあ今日は暑いですし、そうめんにでもしましょうか」

いそいそと立ち上がって作業を始めた二人をイリス君は悲しげに見ていた。

話し合いも今日はもう終わりということ、私はお役目御免となつて自分の部屋へと帰る。

「ただいまー」

真つ暗な部屋に私の声だけが空しく響く。

そのことは気にせず、私はおやつに持っていったスコーンと紅茶を靴から取り出して昼食代わりにする。ほんとはウィリアムさんたちを誘われていたけど、私はそれを断った。

食べ終わって一息ついた私は本を取り出して椅子の上で体育座りをして読み始める。

内容は、在り来たりなファンタジー小説だ。

この世界には魔法があつて、精霊や龍が棲んでいる。主人公は破天荒な性格の魔法使い。旅をしている魔法使いは途中、山の中で怪我をした龍の子供を助ける。迷子になった龍の子供を親のいるところまで帰しに行く話である。まあ、その途中でお約束の闇商人が龍の子供を手に入れようと躍起になったりとか、お姫様が自分のお人形にしようとしたりとか、いろいろあるけど。

そんなに厚くない本なので、夕方には読み終わった。それよりも時間を気にせず読んでいたから晩御飯の準備が出来ていない。

急いで立ち上がったと同時に、インターホンが鳴る。

誰だろう・・・？

慌てて覗いてみると、外にイリス君が立っていた。

### 第三話

私は急いで玄関を開けに行った。

「・・・どうしたの、イリス君？」

「イリス君・・・？」

しまった。つい、心の中の呼称が出てしまった。

「勝手に呼んでごめんね。それで、どうしたの？」

とりあえず大声は聞こえなかったはずだから喧嘩ではないだろう。本を読み始めると周りが見えなくなるので自信はないが。

「別に。ただ単にこっちに来ただけだ」

「・・・君はツンデレキャラか。」

「あそこに居辛いならそう言えば良いのに・・・」

「別に居辛くなんかない！勝手に変なこと言うな！」

はいはい。そういうことにしておいてあげるよ。

素直じゃないところに思わず笑ってしまって再びイリス君に怒られてしまった。

だって君で遊ぶと面白いんだな、これが。

ウィリアムさんと陽菜さんはからかう前にこっちがからかわれるし、学校の友達もからかうなら命を懸ける！と言わんばかりの危険人物だらけで、いろんな意味でストレスが溜まっているのだ。

「まあ、とりあえず上がるならどうぞ」

何にもないけどね、と言い置いて一歩下がる。それに顔を顰めるイリス君。

「お前・・・無防備すぎだろ」

「うん？・・・そういう心配は要らないよ。私、有段者だし」

痴漢も捕まえたことあるよー、と笑いながら言つとイリス君は少し顔を青褪めて後ずさる。

何にもしないなら攻撃しないから大丈夫だよ。

結局隣は居辛いからこっちに逃げてきたイリス君と今はお食事中。今から夕食の準備をしようと云うとイリス君は自分も手伝う、と申し出てくれた。

……はつきり言っただけならならぬくらいイリス君の腕前はすごかった。

一体何をどうしたらそんな包丁捌きが習得できるのか！と問い詰めたいくらいの手早さで、段取りも手際が良かった。

私はキャベツとかキュウリとか盛り付けただけでほとんど何もしてない。

「おお！すつごくおいしい！」

いつもより豪華な料理の数々に私が感嘆の声を上げながらイリス君にお礼を言うと、別に、とそっけなく返された。けど、心なしか耳が赤い。

可愛いなあ。

「それより、何で一人暮らしなんだ。普通日本の学生なら親と一緒に住んでるんだろ？」

まあ確かに。それが一般的な考え方だね。

「うん。それほどの理由ではないかな」

「じゃあ何で……」

「ただ単にお父さんもお母さんも私が気に入らないから、ここに放り込まれただけ」

さらりと言った内容にイリス君は驚き、箸を落とした。

うん、まあ。啞然と言葉が今ほど似合うときはないってくらい反応してくれてありがとう。

「それは、十分それほどの理由だろう！」

なに呑気な声でバラしてんだ、と怒られてしまった。むづ。

「そう言ってもねー。私の中ではそんなに重要じゃないし」

そう。私にとって、それはもう”どうでもいい”に分類されている。彼らは私を娘だと思っていないだろうし、私も彼らを親と思っていない。正に”血の繋がった他人”なのだ。

だから、気にしなくて良いんだよ。でも、怒ってくれてありがとう。

「……………」

イリス君はもう何も言えないとばかりに怒りながら食事を再開した。

それから、私たちはまた他愛のない話をしながら同じ空間にいた。まるで、そこにいることが当たり前のように馴染んでいる彼に内心驚きながらも、それに甘えてしまっている自分を自覚して。

これは少し危ないのかなあ、何て頭の片隅で考えながらイリス君の質問攻撃をのらりくらりとかわしていく。

というかイリス君。ちょっと質問する量が多すぎるんじゃないの？

もうそろそろ夜の十一時になろうとしても、イリス君は隣の部屋に帰る気配を全く見せなかった。

「イリス君。君はいつまでこの部屋に居座る気？」

「ん……？ああ。もうそんな時間か」

まったく時間の流れを気にしていなかったのか、イリス君は私が持っている本　買うのに一ヶ月も待つてようやく手に入れたイギリス文学の本だ　を読んでいた。

「そろそろ隣に戻ったほうが良いんじゃないの？」

ウィリアムさんも多分心配してると思うし。

「・・・そうだな」

そう呟きながらも機嫌が急降下していく。

戻りたくないんだろ？、なんて考えながらもさっさと追い出そうと考える私。流石に年頃の女の子としてその一線は越えたくないからなあ。

「なあ。その・・・この部屋に泊めてもらえないか」

「駄目」

即答してしまった。

あ、イリス君が明らかに落ち込み始めた。意外に繊細だったようだ。

「うん。流石にそれはちょっとね・・・」

「いや、俺も変なこと言っただけ悪かった。・・・じゃあな」

そう言っただけで玄関へと歩き出してそのまま出て行く。

うーん、イマイチ扱い方が分かりにくい人だなあ。でも純情ってわけでも無さそうだし。・・・ま、いつか。

結局考えることを放棄した私は着替えて眠りについた。

もちろん、ベッドに入っただけですぐ熟睡できる神経の持ち主ですから、全くもってイリス君のことなんか考えてもいませんでしたよ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2974t/>

---

風が哭く

2011年10月26日03時17分発行